

第四章 強化方針

一 強化方針

平成十三年度の三年生重村姉妹(新潟)永石(熊本)花田(熊本)村川(熊本)下釜(飯盛)浜崎(西浦上)三輪(瑞穂)平成八年に鶴鳴学園は創立百周年を迎え、さらに飛躍すべく張り切らなければならなかったが現実はこのもたちの数が年々減り、それが鶴鳴の生徒募集にも響いて学園の経営は年々苦しくなっていた。それは鶴鳴学園だけではなく、全国的な傾向で全国でも有名なプロスポーツ選手や全日本クラスの選手を何人も輩出している私立高校が部活動強化から撤退して進学校化し、学業で募集活動を展開し始めた。

要するに、私学のスポーツ名門校というのは、経営にゆとりがあれば部活動強化まで手が回せるのであって、生徒募集が死活問題となってきたら文武両道ではなくても学業一道で生き延びようとするのだ。鶴鳴学園もこのことでは何度も揺れた。生徒教減に歯止めが効かなくなれば、学園の経営を維持するためには①お金がかかる部活動の強化を辞める。②教職員の給与やボーナスを減らす。③教職員をリストラするの三つの方法しかない。丁度その時期に部活動指導の先頭を走っていた私は教頭という管理職を拝命することになり、学園経営と部活動強化の板挟みになってとても苦しんだ。

次に掲げる二つの文書は、平成十五年に長崎インターハイが開催され、その前年に定年の六〇歳を迎える私が、定年後のことも考慮に入れて校長宛に提出したものである。

平成十三年一月四日

校長 田 中 正 明 様

強化部の強化方針について(私案)

バスケットボール部監督 山崎 純男

平成一〇年五月七日放課後、体育部の顧問連絡会が行われました。内容は、柔道部の強化部昇格についてでした。その時、〇〇氏が次のような発言をしました。「特待生については人数よりも経費という面から考えなければならない。ついては、自宅外通学の特待生は自宅通学特待生二人分とみなさなければならぬのではないか」

この〇〇氏発言は具体化しなまま経過していましたが、平成十二年十一月二七日の体育部顧問連絡会でX氏が「平成十四年度の新入生からは、寮生の特待生については寮費の一部を自己負担させなければならぬことになるかもしれない」と言いました。このことについて私案を述べさせていただきます。

市内及び近郊在住で本校バスケット部を志願した優秀選手は、昭和五二年度入学の熊谷(西浦上中出身全日本チーム主将)、平成元年度入学の浜口(深堀中出身アトラントオリンピック出場)、平成二年度入学の一瀬(長与中出身早稲田大学)の三人だけです。

市内及び近郊在住で、彼女たち以外にも優秀な選手はいましたが勧誘できませんでした。なぜなら、ほとんどの選手たちが、中学レベルでは優秀な選手であっても高校さらにはその先までバスケットボール選手として成功するのにかどうかに不安を持っており、バスケットボール選手として成功しなかった場合のことを考えて世間体の悪くない学校を選ぶからです。残念ながら、そうなる则本校の教育内容や教師の力量が〇〇高校と差はなくても世間のランキングでは〇〇高校には勝てません。

前記三人のような選手や県外から志願する選手たちは学校のランキングとは関係なく、本校のバスケットの名声と実績を利用して進路を選択し、自分の才能のすべてをそれにかけることを最優先に考えて志願して

くれた選手たちです。そのような選手が毎年長崎近郊に出現する確率は非常に低く、強化を考えた募集をするならば学校近郊だけではなく、遠隔地まで拡げた選手募集を中心に考えなければなりません。

そこで重要なことは、強化をどう考えるかということです。広く浅く、県大会上位レベルの活動で満足するのか、それとも全国レベルを目指すのかをはっきりさせなければなりません。もし、充当する経費は据え置きのみで後者を望むのならば現在の強化部を縮小して特定の強化部に絞らなければならぬでしょう。寮生が多いから寮生には自己負担を、と考える前にそのようなビジョンをはっきりさせることが重要だと思います。

また、寮生に自己負担をさせるならば、公立進学ならば経費がいくらかかるのかとか、自宅に居ても食事はするのだから食費だけは徴集するなど、はっきりと基準を設けることが大切だと思います。そして、他校と争った場合にいくらまでの自己負担ならば獲得競争で互角に戦えるのかも十分に調査しなければならぬと思います。

平成十三年四月二四日

理事長 原 田 延 介 様

校 長 田 中 正 明 様

バスケットボール部監督 山崎 純男

バスケットボール部の強化部辞退について（伺い）

バスケットボール部の強化部指定を平成十五年の長崎インターハイ以後辞退したいと思っております。よろしいか伺います。なぜ「お願い」ではなく「伺い」とするのか。その理由はバスケットボール部が辞退するというのは他の部の活動に多大な影響を及ぼす可能性があることで慎重に検討しなければならぬからです。

辞退する理由はただひとつ。生徒募集の不調が続いている中で強化部を抱え続けるということは、学園の経営難に一層拍車をかけることになるのではないかと懸念があるからです。決して情熱や体力が枯渇したからではありません。

幸い、現在の新生は単学年でガードからセンターまで、すべてのポジションが揃っているので次年度の募集に期待せずとも長崎インターハイを乗り切るには充分の駒が揃っています。また、私の後継者は新たな採用をせず、学園内人事でM氏が引き継ぐのではないかと話が出ていますが、それが単なる噂話ではなく根拠のある話であるならば、彼にとつてクレインズバスケットの実績をそのまま引き継ぐというのは非常に重圧になります。ですから、M氏がゼロから出発するという意味でも強化部を辞退するには長崎インターハイが好機だと思います。

と、こういった私が長崎インターハイを契機にクレインズバスケットを見放すように受け取られるかも知れませんがそうではありません。むしろ、M氏のゼロからの出発に私自身の生涯のすべてを賭けてバックアップする所存でいます。それは、非常勤講師で残ろうが退職して外部支援者としての立場になろうがまったくその気持ちはかわりません。

以下具体的な申し出をいたします。

一 まず、現在の中学三年生以降の特待生募集活動はしません。

二 次に、平成十二年一月二八日付け文書で私の後継者としてT M君（現在W大学在学中で平成十五年五月卒業予定。アメリカの大学なので日本国の教員免許が貰えない）を推薦していましたが撤回いたします。

三 前記のことが受理されるならば今年度の募集活動からこのことを通知しなければなりません。

四 なお、前記の内容についてM氏には何も伝えていませんし、M氏の意向は何も聞いていませんので、彼の意向を確かめることから始めなければなりません。

生徒募集で苦戦が続いているのと自分自身の定年が目の前に迫っていることで私はこのような意見を述べ

たが理事長は部活動の強化から撤退しないばかりか、第一章で述べたように私を短大に移籍させてさらにバスケットボール部の強化を継続させてくれた。

二 新潟姉妹

前年の三年生は茨城から来た選手が二人いた。今年度の三年生のスタメンは全て県外選手である。前年度も今年度も全員自主志願だ。ありがたいことである。ただし、選手層が薄いのでこの年はそれで苦しんだ。

平成十二年一〇月 地区新人戦 優勝 スタメン 重村姉② 重村妹② 村川② 永石② 花田②

【案内文書】

新チームのメンバー構成の特徴は選手層が薄いということです。エントリーは十五名までOKですがクレインズは十一名しかいないので三名分空欄です。全体でもこのように選手が少ない上にさらにその内訳を見るとスタメンの五人と他の選手との較差がまた二ランク以上開いています。

このような状況になったのには理由があります。二年後の平成十五年に長崎県でインターハイが開催されますが、そのため昨年は特待生枠を考えた募集をしなければならなかったので、今年の一年生の募集活動を積極的にやれなかったのです。だから選手数が少ないし、上級生との較差があるのは仕方ありません。

ですから、今年の試合は本当に強い相手と試合をやる時のスタメン五人はフル出場になるという心の準備をしなければなりませんし、他の選手とスタメンの較差をせめて一ランクに縮める努力を続けなければなりません。

スタメンの五人は、他校から補強選手を入れたとしてもそのまま国体（地区新人戦後に成井たちを加えた平成十二年度の国体）の主力選手でもあり、同年年末のウィンターカップの主力選手でもあります。このように、重村たちは成井たち上級生とともに全国大会の舞台で戦いながら、それと平行して下級生を導きながら戦わなければならない新チームの試合が続きます。さらに、平成十五年の長崎インターハイに向けて現一年生と来春入学の新入生にクレインズ魂を植え付けなければならないという仕事も待ち受けています。ひとり三役です。まだ自分自身をコントロールできる自立心さえ身に付いていないスタメンの五人にとってはこれからしばらく地獄の苦しみが続くかもしれません。

しかし、考えようによっては彼女たちは幸運だとも言えるのです。なぜなら、部活動をしていれば普通の生活をしていては気がつきにくい自分の愚かさやイヤでも対面することになるのですから。人は自分の愚かさをイヤというほど見なければ成長しない生き物なのです。

私は彼女たちに自立心が芽生えてきたと思われるまで追い込み続けるでしょう。たとえそのために彼女たちのパフォーマンスが一時低下したとしても追い込み続けます。もし彼女たちに自立心が芽生え、自分の愚かさを乗り越えられるようになった時、栄光は黙っていても手に入ってくると思うからです。

しかしそれは、私にとって簡単なことではありません。それは毎日が戦場になると同じなのです。バツタリ敵兵とはち合わせをして、一メートルの距離を隔ててにらめっこをする。相手を殺さなければこっちは殺される。それと同じ状況が毎日続くのです。それでも私はギブアップしません。追い込み続けます。

【結果報告】

初日

二回戦、観覧席で見学している成井と野田をフロアに呼び、ベンチ端に座らせました。コーチとしての目で試合を見、声に出して思いを表現させるためです。後半、三輪以下の五人をコートに送り、主力はベンチに下げて今度はスタメンの選手に同じことを指示しました。

試合の流れを考える。コート上の選手たちの心理を読む。コートの外からそういう目で見る方がコートの

中で実際にプレイをするよりも彼女たちにとっては重要だと思っからです。また、それが彼女たちにもっとも欠けている部分だと思っからです。

二日目

三回戦、思いが空回りするだけで前半はまったくダメ。後半は立ち直るかと思ったのですがそれもダメ。結局いいところはひとつも出ないまま終わりました。大差をつけて勝っている試合なのに彼女たちのユニフォームは相手の選手よりも汗で濡れています。肩で息をしながら試合をしています。この大会の直前に行われた国体の疲れがまだ残っているのでしょうか。国体直前の強化試合からずっと休みなしだったので仕方ないと思います。

決勝戦、前半のクレインズは前の試合の出来が悪かったのを一気に取り戻す動きで相手を圧倒しました。が、なんとか国体に近い試合ができたのでホッとしたのか、後半はまた夢遊病者がコートをさまよっているような試合をしてしまいました。

しかし私は一言も叱りませんでした。国体で目を見張る活躍をしたのもクレインズの真の姿。今回のような未熟さがまだ残っているのもクレインズの真の姿。これから一步一步階段を上って本当のホンモノになっていけばいいのです。このあと、今週末に休みを与えて十一月からまたエンジン全開でウィンターカップに向かいます。グラウンドでの体力トレーニングが主体になります。

【後日談】

私は五〇年のコーチ生活で四組の双子姉妹を引き受けた。最初の双子は昭和五三年度三年生の波多江姉妹である。福岡県の小郡市出身だ。次が今年度三年生の重村姉妹。新潟市出身。次が平成十六年度三年生の岩永姉妹。島原半島出身。そして平成二二年度三年生の岸上姉妹。長崎市内出身である。

双子の選手には気を使う。実力伯仲ならいいが、そうでないときは一方がスタメンになれても一方はエントリーにも入れないということが起こる。勝負に勝つのが目的の競技スポーツだから実力通りの序列で何の問題もないだろうと言われるかも知れないが、いくら鬼監督といえどもずっと一緒に育ってきた子を引き裂くようなことはなかなかできない。

波多江姉妹の場合は共に力があつたので起用するのに気は使わずに済んだ。性格も、妹がやりたい放題で姉がそのフォローをするタイプなので姉をポイントガードにして妹をシューティングガードで暴れさせるという役割分担で、チーム内の人間関係も戦力としても何の問題もなかった。

今年度の重村姉妹の場合も波多江姉妹と同じようにどちらもスタメンで起用できる力を持っていたので私は波多江姉妹と同じように、姉をポイントガードにして妹をフォワードにするという役割分担で攻撃システムを組み立てた。それでしばらくやってみたがそれではどうもうまくいかない。よく観察してみると波多江姉妹とはまったく逆で重村姉妹は姉がやりたい放題のことをやり、妹が黒子に回るというタイプだった。波多江姉妹の場合も重村の場合も二卵性双生児だった。二卵性双生児は、遺伝的には兄弟姉妹程度の違いがあり、たまたま胎内生活が一緒であつて出産が相前後した二個体である。だから、理論的には姉が三年生で妹が一年生で二人の姉妹がいるという認識でいいのだが、現実には双子を目の前になると、お腹の中でも一緒にすごしたという生い立ちとか生育環境に先入観を抱いて見てしまう。

重村妹の黒子というか気配りというか、姉に対しては一本専用のアンテナがあるようだった。同学年の花田も永石も村川も姉の典子も、ディフェンスは目も充てられないほどひどかったが、不思議なことに典子が抜かれそうになるときだけは誰よりも早く安紀がヘルプに来た。日常生活でも安紀が典子に気を使っているとか姉が妹を抑えているということとはなかったが、コート上ではいつも安紀は典子の前に出ようとはしなかった。必ず半歩下がっていた。しかし、典子が不調と見るやガンガンやり出すのだ。幼い頃からの生活を通してそうする方が調和がとれるということを学習し、それが習性になっていたのだろうと思う。

【案内文書】

- 一〇月十八日（水） 富山国体決勝戦後直ちに帰途につく。
- 一〇月十九日（木） 十一時三〇分学校到着。
- 一〇月二〇日（金） 地区新人戦のための初練習。
- 一〇月二一日（土）―二二日（日） 長崎地区新人戦。

右記のように、富山国体のあとは下級生にとっては息つく暇もないスケジュールでした。しかも、夏休みに入ってから国体まではずっと強化試合の連続で、選手たちには休養を与えていません。ですから地区新人戦が終わったあとの一週間は休養期間としました。

- 一〇月二三日（月） 休養。
- 一〇月二四日（火）―二七日（金） 練習は一時間三〇分以内。
- 一〇月二八日（土）―二九日（日） 二日間まるまる休養。
- 一〇月三〇日（月） 五千円の軽いペース走とシューティング三〇分のみ。
- 十〇月三一日（火）―〇二日（木） 二時間以内の練習。
- 十一月〇三日（金） 休養。
- 十一月〇四日（土） 通常の三時間練習に戻る。

今年から来年にかけてはおそらく、県内の試合で勝ち負けを心配するようなことは起きないと思います。なぜなら国体のスタメンから成井がひとり抜けるだけからです。成井の替わりは村川です。村川がどんなに努力をしても成井のリバウンドとブロックショットに追いつくのは容易ではありませんが、村川には成井が絶対真似できないドリブル突破のスピードがあります。それに、成井に追いつく可能性のあるスリーポイントシュートも持っています。だから成井の穴は充分埋まります。私は現チームで身体的な能力順にランクを付けると村川が一番だと思っています。ただ彼女には、土壇場で弱気になるという弱点があります。それを克服しなければなりません。

他の四人は今年のスタメンそのままですが、彼女たちとて村川と似たり寄ったりという一面が残っています。ちよつとしたミスが原因で大崩れする花田、頑張れば頑張るほど自分しか見えなくなる典子、自分を追い込めない永石、緊迫感が薄い安紀。しかしそれらの弱点も、手に負えない状態だったのが一年半かかって退治し、封じ込めて富山国体に行くことができました。が、封じ込めたはずのフタがゆるんでまた弱点が漏れ出したりすることがこれからも時々起こるでしょう。その度に退治してまた封じ込め、二度と漏れ出さないようにする作業が続きます。「ウインターカップ楽しみですね」とか「来年は三冠狙いですか？」と言われますが、フタが完全に閉まるまでにはまだまだ時間がかかります。

【結果報告】

「ケガをしなくなったなあ」ということばがのどまで出てくるんですが誰にも言わずに飲み込んでしまっていました。言ってしまうば途端に誰かがケガをしそうで怖かったからです。ではなぜ今ここでそれを口にするのか。人はいいいことがあったらいつまでも秘密にしておけないじゃないですか。理由はそれだけです。強くなったという基準はいろいろあります。体力がついた。シュート成功率が高くなった。デイフェンスが強くなったなどなど。でも本当に強くなったと言えるのはケガをしなくなった時だと私は思っています。私の長年の経験からすると、ケガの原因として最も大きいものは心身のバランスです。それを引き起こすのは焦り、不安、不満などのストレスです。ということは、新チームの二年生の心の中から焦りや不安や不満がなくなった：いや、なくなるわけはないから少なくともなくなったのでしょうか。

「ケガをしなくなったけど俺はまだまだ信用してはいないよ」と選手に言いました。よくなったと思えるのはほんのここ三ヶ月。それまでの十七ヶ月間はこのチームの先行きが見えないという焦りで振り回された日々だったんですからそう簡単に信用するわけにはいかなかったんです。

それを裏付ける証拠が決勝戦の後半に出ました。十七ヶ月間一生懸命退治する努力を続けた弱点が頻繁に

出たのです。確かに強くはなったのですが、本当に強くなったのかを確認する作業をこれから続けなければなりません。言い換えれば、うまくいかなくなった時にどこまで崩れるかということを見極める作業をしなければならぬということです。

具体的な例を挙げましょう。例えば八月以降の永石はシュートが入らなくなると、相手を崩しもせずに入るわけがないタイミングでシュートを打ち続けることがしばしばありました。そんな時の永石はすでに涙目になっていてディフェンスもリバウンドも何も頭の中にはなく、シュートが入らないのがただただ悲しいだけでした。この永石の例がもっともわかりやすい代表的な事例です。しかし国体であそこまで成果を挙げられたのは、その永石がリバウンドで活躍してくれたことが大きな要因です。

このように「以前はこうだった。しかし今はこうなった」と話せるような事例がたくさん出てくるようになった時、本当のホンモノになるでしょう。それが少しでも早まるように後押しするのが私の仕事です。

平成十三年一月 九州春季二次予選 優勝 スタメン 重村姉② 重村妹② 村川② 永石② 花田②

【案内文書】

ウィンターカップのスタメンから成井千夏が抜けて村川友美が入ります。他の四人はそのままです。だから県内では圧勝のはずです。ですから観点を勝負ではなくプレイの質に持っていかなければなりません。プレイの質の吟味はここ当分の間あの丹原戦を基準にします。「この動きで丹原を振り切れるか?」「このディフェンスで丹原を守れるか?」「今の気持ちで丹原の気迫に対抗できるか?」など、自分のプレイの一つひとつをあの丹原戦に照らし合わせてみるのです。

時が経てば記憶も薄れてくるのでいつまでも丹原戦を基準にはできないでしょうからまた新たに基準を設定し直す時が来るでしょうが、当分の間は丹原戦を基準とします。

個人に目を向けてみます。

重村典子 ウィンターカップの丹原戦では久々に彼女独特の表情になりました。タイムアウトの時に私の話を聞く顔が、今起きたばかりでまだ顔も洗っていないという表情なのです。そんな時の彼女は動きが重くて本来の仕事ができません。それでも私は彼女を一番頼りにしています。困った時になんとかしようとしてくれるからです。試合中に酸素ボンベを使うのもオレンジジュースを飲ませるのもそんな彼女に目を醒ませようと思って考えついたことですが、彼女自身もそんな処方をしてしないで治す努力をしなければなりません。

重村安紀 記録として証拠に残るようなプレイはしませんが、他の選手が不調な部分を必ず彼女は補ってくれます。貴重な存在です。しかし、誰かが不調にならなければ本気にならず、普段はのんびりしています。それだけやれるんだっいたらいつでもそうすれば…。

村川友美 これまで何回も言いましたが、彼女の身体能力を上回る選手はクレインズにはいません。瞬発力だけでなく、ドリブルやパスやディフェンスにおいてもです。ただ、なぜかシュートに関してだけは弱気です。これをなんとかしなければなりません。スリーポイントだって打てば典子や永石を脅かすぐらいのシュート技術をもっているのに打とうとしません。もっとシュートの練習をしなければならぬのではなく、打ちさえすれば入るのですが、踏み出す勇気がないんです。

花田有衣 彼女の「すごい!」と「ひどい!」にチームメイトが振り回されてきました。「すごい!」は残ったまま「ひどい!」が底上げされ、その振幅がゆるやかに広がってきました。

永石春奈 棒立ちのままシュートを打つだけだった彼女はリバウンドに参加するようになりました。これだけだけチームに貢献しているか計りしれません。今年はそれに加えて「守れるようになった」を付け加えなければならぬでしょう。

右記五人に続く選手がいません。はるか後方からついて来ているだけです。奮起を望みます。

【結果報告】

一月三日から八日まで本校で強化合宿をしました。参加したチームは前半組鹿児島女子、徳島城北、宇部女子。中盤組九州女子、神村学園。後半組北斗商業、佐世保商業の七チームです。内容のほとんどが二〇分のスクリメージです。

四日目、九州女子とのスクリメージを一本落としました。動きが重くて悪い試合なのにコート上の選手たちから気迫が伝わってきません。重村姉が途中から少し蘇ってきましたが他の選手は呼応せず、そのままずるずると負けてしまいました。以前のようにはパニックに陥ることはもうありませんが、本当に強いチームはこんな内容やこんな雰囲気にはならないという試合をしてしまいました。

そして：

今大会初日、それがそのまま出ました。

さらに二日目、それが改善されないまま終わりました。

私はこの二日間、彼女たちと一緒にの場所で同じ空気を吸っていることが嫌で嫌でたまりませんでした。監督の私が選手も読む文書でこんなことを書くのはよくないのでしようが本音です。ミスが多いからとか、思うように点が取れないからという理由ではありません。彼女たちの基準が気に入らなかったのです。

彼女たちは成長しました。本当に成長しました。一年前をふり返れば信じられないほど成長しました。だから国体であれだけの試合ができたのです。その後のウィンターカップも丹原には負けましたが決してインターハイの東京成徳戦のようなふがいない試合ではありませんでした。心から「お疲れさま」と言ってやりたい試合でした。そんな試合ができるようになったのですから、今の彼女たちの基準は「成長した自分」でなければなりません。なのに、今大会は昔の情けない自分が頻繁に登場しました。私が許せなかったのは、そのことに怒りが込み上げてきた選手がいなかったからです。

私は指導者ですから不安を抱えている選手たちに「大丈夫なんだ」とか「やれるぞ」という思いが根付くまではどんなことでもして導きますし応援します。しかし、「やれるぞ」と思った選手がさらに成長するには、成長したはずなのにまだこんなぶざまな姿をさらしている自分自身に怒りが込み上げてこなければなりません。成長した自分が獲得したはずの「怒り」を選手の目付きや態度から感じ取れなかったのが残念で残念でたまりません。何もかも投げ出してしまいたい悔しさをかみ殺しながらこの報告書を書きました。

平成十三年二月 九州春季選手権 三位 スタメン 重村姉② 重村妹② 村川② 永石② 花田②

【案内文書】

ちょうど一年前、この大会の案内文書に私は次のように書きました。

一月二二日、宮原が風邪を引きました。それをずっと引きずっています。一月二八日、花田が風邪を引きました。これもまだ引きずっています。途中省略：というわけで、この時期は毎年、練習のできばえよりも「今日は何人練習に出てくるだろうか？」という心配の方が先になります。

今年のクレインズは昨年の九月以降ずっとケガや病気なしでここまで来たので、今年はこの時期に病気をしないで乗り切れるかなあと考えていましたが、重村姉が遂に風邪にかかりました。一月十九日のことです。翌日重村妹が風邪を引きました。そして二人がどうにか復帰した二月一日今度は花田がやられました。ですから一月十九日以降の練習は部分練習のみ。なにしろ、スタメンの五人と他の選手の較差があまりに大きすぎるのでスタメンのうちの一人でも欠けたら練習になりません。ここ三週間はとうとう足踏み状態のまま時が過ぎてしまいました。

一年前のこの大会、私は大会直前になって花田をポイントガードにする考えを思いつき、わずか一週間の間にわか仕立てでこの大会に臨みました。わずか一週間の練習で試合に臨んだのですから当然うまくいきません。二回戦で国府に負けました。長身選手にしてはドリブルが巧いというだけで、他の分野例えば状況判断とか、自己制御とか、根気強さなどのポイントガードには不可欠の要素が今後身に付くかどうかかわからない花田をポイントガードにする。これは大変危険な発想です。でも、いろんな方法を考えては打ち消し、試し

ては失敗し、何度も何度もそんなことを繰り返していた私にとって、これはまさに排水の陣でした。

あれから一年、花田の自己制御、状況判断、根気強さなどの要素は以前問題点を残したままです。しかしそれを埋め合わせる技術がしばしば相手を粉砕し、富山国体のようにすばらしい試合もできるようになりました。その反面、突然無気力になり、先日の県大会決勝戦のような試合をしてしまうこともあります。ですから、発想が大成功だったとはまだ言えません。大成功になるかならないかは、あれから丁度一シーズン経ったこの大会の戦いぶりです。占うことができますと思います。

【結果報告】

一昨年は一年中チーム創りの構想が描けずに苦勞しました。昨年は花田をポイントガードに仕立て、重村姉をフォワードに回すことで個々の持ち味を明確にすることができました。私はこの二年を振り返り、「この発想が大成功であったと言えるか言えないかは、この大会の戦いぶりです。占うことができます」と、今大会の案内文書で書きました。その答えを書きます。

初日の戦いぶりは昨年とまったく同じで見ると耐えないものでした。しかし、翌日の中村学園戦は国体やウィンターカップに劣らない試合内容でした。ですから半分ホッとしています。平成十三年度の全国大会で確実にベスト四に名を連ねてくるチームは桜花、中村、丹原、山の手あたりでしょう。クレインズはその一角に手が届くところに居ると感じました。「間違いなく一角を占めている」と断言しなかったのは、初日の試合ぶりがあるからです。

個人的な分析をします。大会前からずっと、精神面もプレイも安定していたのは永石でした。それは今大会でもブレませんでした。二日目、自分にシュートチャンスが回ってこなくても焦らず、ディフェンスやリバウンドを一生懸命やろうとしていた永石はたくましく見えました。重村姉妹のうち姉にはもう何も言うことはありません。妹も時々気を抜くくせがなくなり、本当に信頼できる存在になってきました。この三人はここしばらく放置していても自分で伸びていくでしょう。そこでこれからしばらく、花田と村川の改造に着手したいと思います。改造項目は、両者のシューティング技術と村川のディフェンスの手の使い方です。次に中村学園と対戦するのは六月の九州大会です。それまでに、総力でカバーし合って個々の弱点が試合中に顔を出さないようなチームに創り上げ、また皆様に観て貰いたいと思います。

― 閑話休題 ―

現在の中学三年生は平成十五年度の長崎インターハイの主力選手です。クレインズには次の選手たちが来てくれます。成井妹（茨城県御所ヶ丘一六四cm）二宮（山梨県甲西一六二cm）林田（大村市桜が原一七二cm）立川（諫早市北諫早一七八cm）清水（南高来吾妻一七七cm）谷川（南高来深江一六四cm）黒石（長崎市三重一七〇cm）。クレインズとしては平成三年度の浜松インターハイ優勝の時以上のリクルートができましたが桜花学園と中村学園にも全国レベルの新生がズラツと入るようです。神様はなかなかかな楽をさせてくれませんが、これだけ立派な恩返ししの舞台を用意してもらったのですから長崎インターハイは優勝を俵つてがんばります。

三 熊本インターハイ

平成十三年四月 県下春季選手権 優勝 スタメン 重村姉③ 重村妹③ 村川③ 永石③ 花田③

【案内文書】

三月十八日が新入生のオリエンテーション。三月十九日から新入生全員が参加し、平成十三年度がスタートしました。三月二二日までは、上級生が新入生にクレインズのノウハウを教えるためにすべての時間を使いました。そして、その日の午後から遠征に出かけました。関東↓四国↓長崎と、西日本縦断の長期遠征です。帰ってきたのは四月一日の夜。上級生の身体はボロボロになりました。でもケガ人はひとりも出ませんでしたし、流しただけのゲームや無意味なゲームは一試合もありませんでした。新入生だけでも二〇分のス

クリメージを八セット消化しました。大収穫でした。

さて、新入生を分析してみましよう。

やはり即戦力の一番手は谷川（島原深江）です。これから体重を落としてディフェンスができるようになれば改造箇所はありません。重村典子のバックアップを充分果たしてくれるでしょうから典子を安心して使えます。

二宮（山梨甲西）も即戦力として使えます。ポイントガードとして働いてもらうつもりです。現三年生が退いたあとはオフENSEを風軍団と同じシステムにするつもりなので、クレインズバスケットの考え方をゆつくり吸収できるようにすることに重点を置いて指導します。

成井の筋肉と反射神経はすばらしいです。姉は三年生になってから開花しましたが妹はもっと早く咲きそうです。でも、バスケットのセオリーをまず覚えさせなければなりません。それに少し時間が必要でしょう。

立川は中学時代はセンタープレイヤーでしたが春休み遠征中に見事にフォワードに変身しました。遠征後期の徳島合宿では試合中にスリーポイントシュートを打つんです。しかもナイスタイミングで。私は立川の身体的な能力や技術の将来性よりも知的理解力に関心しました。清水をセンターとして使い、立川をフォワードにコンバートしようと考えていたのですが、それが定着するまでには一年かかるだろうと思っていました。それが半年で済みそうです。清水も体重を落としてパワーをつければインサイドプレイは今のプレイでそのまま使えます。

林田は重村安紀そのままです。リバウンド（春休み遠征の試合では一年生の中で一番多く取ったのではないでしょうか）・スリーポイント・ドライブ・パスなんでもできます。ケガをさせないようにみんな大事に育てていきたいと思えます。

【結果報告】

花田有衣が全日本ジュニア選抜に選ばれ、七月上旬アメリカ遠征を経てチェコで行われる世界女子ジュニア選手権大会に出場します。クレインズから全日本に選ばれるのは平成三年の浜口典子（鶴鳴↓エナジー）以来一〇年ぶりです。もともと、浜口は高校在学中にジュニアではなく全日本そのもの選ばれました。花田はそのひとつ手前の全日本ジュニアですが、浜口と違って花田はポイントガードとして選ばれたのですから精神的な負担は浜口より重いと思います。

私は花田に、国際試合で活躍してきてほしいというより、全日本ジュニアに選ばれたことが花田を人間的に成長させる基になることを望んでいます。

さて、新入生を交えての初の公式戦が終わりました。以下は翌朝選手全員を集めて言ったことばです。

- 一 試合に勝つためには是非必要な選手だ。
 - 二 試合に出してやりながら巧くなっていこう。
 - 三 お情けでしか出してやれないよ。
- エントリーできる人員だけに絞って言えば、どの選手もこの三つのうちのどれかに入る。そして、
- 一 ほんの少し改良すればランクが上がるよ。
 - 二 改良にはかなりの時間がかかるなあ。
 - 三 うーん、間に合うかな？

というランクもはっきりする。

誰に言われなくても自分のランクをはっきり認識しろ。それが現実だ。危険なことばがある。それは「努力」ということばだ。努力することは大切だけれども努力していれば認められるかというところではない。努力というのは結果を出して初めて「努力した」と認められるもので、努力に「努力しているから認めてください」という進行形の形はない。

平成十三年六月 県下高校総体 優勝 スタメン 重村姉③ 重村妹③ 村川③ 永石③ 花田③

【案内文書】

毎年県高校総体のエントリーは三年生を最優先にします。三年間苦楽をともにしてきた級友たちの前で推戴式の晴れ舞台に立たせてやりたいからです。次に優先させるのが今年は一年生になりました。今年の新入生は誰もが興味津々で見ているからです。そういうわけで、今年の県高校総体は二年生にがまんしてもらうことになりましたが、九州大会以降は実力と将来性最優先のエントリーになります。今年の県高校総体は勝ち負けの心配はしなくていいので個人的なことを目標に臨みます。大きな目標は三つです。

- ①公式戦における花田のスリーポイントシュート数と確率を高める。
- ②立川のペイントエリア内のボール保持能力を高める。
- ③清水のインサイドプレイを強化する。

次に目標とするのが二宮・成井・林田の実戦を通しての訓練です。ですから、相手がどんなチームであれ花田・立川・清水は他の選手より出場時間が多くなるでしょうし、二宮・成井・林田もそれに次いで出番が多くなるでしょう。また、最後の県高校総体となる三輪もできるだけ多く試合に出してやりたいので、重村姉妹・村川・永石・谷川は出場時間がとても少なくなると思います。この五人を応援する方々は今度の県高校総体はがまんしてください。谷川は一年生なのになぜ出場時間が少なくなるのかというと、改良しなければならぬ箇所はあるものの、現在の力が重村姉妹・村川・花田・永石と同等だからです。

新入生が練習に参加してからちょうど二ヶ月。新しい発見や修正がたくさんあります。最初は「すごい」と思っていたけど時間がかかりそうな弱点が見つかった選手がいたり、「時間がかかりそうだな」と思っていたのに練習試合で試しに使用してみたら意外な長所が見つかった選手がいたりとさまざまです。が、共通して全員二ヶ月前に比べて変わったところがあります。それは顔つきです。わずか二ヶ月しか経っていませんが下級生らしい顔つきが消えました。原因は「自覚」だと思います。

【結果報告】

選手起用に少し狂いが生じました。立川が貧血、林田・成井・二宮が貧血予備軍と判明したからです。五月二〇日の医学測定血液検査で立川の貧血の程度が明らかになりました。結果を知らされたのは五月二十九日ですが、その前に表情や動きから見て貧血間違いなしと思っていたので治療は開始していました。検査結果はヘモグロビンの値が一〇・九で血清鉄は二八です。

他の選手の数値は、ヘモグロビンは十二以上あるけれども血清鉄が五〇未満だったり、血清鉄は五〇以上であってもヘモグロビンが十二未満だったりで、両方とも規定値未満というのは立川だけですが、これからハードなゲームが続くので早めの治療が必要だと思いい、四人とも鉄剤を投与しながらの軽い練習のみという状態で高校総体を迎えました。

大野慎子が四日と五日の二日間応援に来てくれました。五月二日から六月十五日まで約一ヶ月半の帰省なのでそうです。今回の帰省は虫歯の治療のためです。アメリカで虫歯の治療をすると目が飛び出るほど治療費が高いので日本で治療することにしたのです。

慎子の感想「上級生もたくましくなったけど、一年生もすごいですねえ」
私のコメント「おまえたちと比べればな、でもまだまだ甘いよ」

追伸

ユニフォームを三着新調しました。二才用と三才用と四才用です。背番号は二才用が四分之一、三才用が三分の一、四才用が二分の一です。胸には選手用とまったく同じ鶴が飛んでいます。特注なので選手用のユニフォームより高いです。これからの大会に小さなお子様連れで応援に来てくださる方は是非このユニフォームを着させて応援してください。



【案内文書】

続くインターハイも熊本です。インターハイは夏休みなのでもっと多くの部員を連れて行くことができずが、九州大会は平日を含むのでエントリーマンバーだけしか連れて行けません。

まず、コンディションからお知らせします。重村典子は先日の県高校総体決勝戦でわずか三分しか出場していませんが、その三分の間に相手とからまって転倒し、手をついたときに左肘を傷めたのでチーム練習から外して別メニューで練習させています。

貧血の立川と貧血予備軍の林田・二宮・成井はチーム練習には参加させていますが体力の消耗の激しいメニューは全て除外しています。

重村と貧血予備軍の三人は十八日からチーム練習に合流させますが、立川はもうしばらく休ませます。貧血の治療がもう少しかかるのがその理由のひとつですが、六月十一日にケガをしたのがもうひとつの理由です。四対四の練習をしていた時谷川のドライブを阻止しようとしてヘルプに行った立川の手が谷川のおともにもパンチするかたちとなり負傷しました。谷川は打撲だけなので少し休めば大丈夫ですが、立川は短母指伸筋挫傷（捻挫）と橈骨遠位端若木骨折疑い（骨がまだ柔らかいのでポキッと折れずに一瞬柳の木を折り曲げる状態になった骨折のことを若木骨折という）という診断。

というわけで立川は九州大会には間に合わないかも知れません。もともと、貧血の具合もあるので頻繁に使うつもりはありませんでしたから、見方を変えればちょうどよい時期にケガをしたとも言えます。一人前になるまでには誰でもケガや病気をしますから、「どうしてもコートに居て欲しい」という時にはちゃんとコートに居てくれる程度のケガや病気ならば運がよかったと思わなければなりません。

次に試合の予想ですが、おそらく中村学園と決勝戦を争うことになると思います。中村と争うにあたって前述のケガや病気がチームの総合力にはまったく影響ありません。スタメンの重村姉妹・村川・花田・永石の五人は万全ですし、谷川もそれまでには間に合いますから優勝したいと思っています。でも、気負いもプレッシャーもあります。苦しみながらどうかここまで辿り着きました。あとは一場面ワンプレイに全力を傾けるだけです。

【結果報告】

出発の前日（六月二一日）、立川が二回目のX線撮影をしました。医師の診断は「若木骨折だけれど今日から練習を再開してよらしい」でした。肘を傷めた重村姉と貧血予備軍の三名が十八日からチーム練習に合流したのに続いて立川も出発前日に合流。これで選手全員が久しぶりに揃いました。それでチームに活気が出ないわけがありません。この日の練習は完璧でした。

翌二二日。出発当日です。午後四時から開会式なので熊本での現地練習は申し込まず、午前中に本校体育館でみっちり練習したあと正午に出発しました。この日の練習は前日にも増して非の打ち所のないできばえでした。

大会初日。クレインズは午後十二時三〇分からの試合なので午前中は時間が余りすぎます。そこで近くの中学校の体育館を借りて九時半から一〇時半まで練習しました。しかし、この練習は出発までの練習に比べると動きが非常に重く、前日までの半分程度のできなのです。でも、もう大会に突入しているので口うるさくは言いません。気になりながら初戦を迎えることになりました。

初戦の都城商業戦。やはり滑り出し五分ぐらいいは相手ペースでした。しかし、ディフェンスを積極策に切り替えるとアツという間に振り切り、後半はほとんど一年生だけで戦えました。気がかりだった動きの重さが吹き飛びました。

二回戦の佐賀北戦は私の失敗で選手に苦勞をかけました。午前中の練習では重かったのに都城商業戦の前半には目が醒めてくれたので体力と気力を翌日に残しておきたいと思い、前半残り九分に三〇対十四になったところで早々と一年生チームに切り替え、都城商業戦の再現を試みたのです。それが失敗でした。残り六

分に二宮のパスミスが出たのをきっかけに相手を調子づかせてしまい、バタバタと追いつかれてしまいました。それからあとは負けもとでやりたい放題やってくる相手にてこずり、結局三年生を休ませようと思っただ策戦が裏目に出てまた三年生をコートに戻し、余分な労力を使わせることになってしまいました。

最終日。初戦の前のアップの時、重村典子はたった今起きてきたばかりという表情をしていました。典子は時々そうなることがあります。そんな時の典子は働きが半減します。昨年の国体の時は最終日までそれが出ませんでした。もうひとつ、最近ではそこそこ得点を上げるし時々「すごい！」というプレイをするので気がつきにくいかもしれませんが、花田の集中力が肝心なところでプツツと切れることがあります。準決勝の戸畑戦でも決勝の中村戦でもそれが出ました。私は典子をチームでもっとも信頼しています。また、花田が目を見張るほど成長したのも認めています。しかし、全国レベルで勝つためにはこの二人の、時々発作が出る持病を治さなければならぬことも事実です。

六月二日から七月二四日まで花田はいません。世界ジュニア選手権(チェコ)に出場するためです。ということは、インターハイ前まで花田をクレインズで訓練する期間はありません。約一ヶ月の海外遠征で花田が一回り大きくなってくるのを期待して残りの選手を鍛え上げ、インターハイに臨みたいと思います。

【非公開のボックススコア用コメント 準決勝戸畑商業戦】

永石のスリーポイント七本に救われて拾っただけ。ほかは何ひとついいところなし。長い人生においても一日の暮らしの中でもわずか四〇分の試合の中でも、思うようにいかない時があるかと思えば何をやってもうまくいく時がある。人の真価というのは、思うようにいかない時にどんな結果を出せたかではなく、どんな気持ちでやれたかで決まると常々言っている。どうだ、この試合はどんな気持ちでやれた？

他人から指摘されなくてもわかるはずだな。そんな自分を思った時、どんな感情が湧いてくる？怒りか？悲しみか？慰めのことばが欲しいか？それとも何の感情も湧いてこないか？他人がいくらお前たちを励まそうが罵倒しようが、お前たちの心の底から湧いてくるものがなければ何も変わらない。

【戦評】

前半残り十三秒。スコアはクレインズ四五対中村四六。この時重村妹のカツティングにナイスパス。しかしシュートはポロツと落ち、リバウンドから中村学園の速攻。クレインズはかろうじてアウトオブバウンズに逃れたけれども、中村学園はエンドラインスローインからのプレイで市野をスクリーンに使った平田がコーナーからスリーポイント。それが決まって四五対四九でブザー。

重村妹がインサイドに跳び込んだ時四七対四六と一点リードで前半を終われるはずだったのに逆に四点負けて折り返すことになった。このとき私は後半の試合の流れが大きく中村に傾いたと感じた。点数はわずかに四点だけ重い四点だった。小さな山と谷が双方を行ったり来たりしていた前半だった。それがあんな終わり方をした。それは小さな山と谷の繰り返しだったのが、いよいよ大きな谷となって後半クレインズ襲いかかる前触れだった。

大きな谷の谷底へ引きずり込まれそうなのを踏ん張る。それは大変なエネルギーを要する作業だ。お前たちもそれを感じていたか？観戦していた人たちの多くは「もう少しディフェンスができれば」と言う。お前達はそれをどう感じるか？ディフェンスの強化をすれば今日のような試合は凌げると思うか？それとも他に解決すべき問題点があるのか？

また、後半三回ドラウトがある。ドラウトはなぜ？どんな時に起こる？ドラウトを切り抜けるには具体的にどんな手だてがある？目に見えた致命傷はなんといってもリバウンドだろう。オフフェンスリバウンドもディフェンスリバウンドも負けている。リバウンドは身長差なのか？それとも他に要因があるのか？

文責 山崎 純男

平成十三年八月 インターハイ二回戦敗退 スタメン 重村姉③ 重村妹③ 村川③ 永石③ 花田③

【案内文書】

七月十三日(金)。夜七時トスアッブで長崎成年女子と試合をしました。花田の替わりのスタメンは谷川です。試合は惨憺たる出来でした。どの選手も動きが重く、汗の量もいつもの倍ぐらいです。それで、十六日からの練習はスタメンの五人は休養させて隔日練習としました。しかも練習日はシューティングのみ。二〇日以降はまとまった休養日が取れないのでここで休ませておかなければならないのです。

このあとのスケジュールは二〇日に再び成年女子と練習試合をしたあと、二一日から二三日まで山口遠征をして二四日は休養。二五日と二六日はチェコから帰ってきた花田が合流してチーム練習。二七日以降は三日の午前中までインターハイ参加の県外チームが本校に集まって合宿をします。

二七日からの強化試合はインターハイ参加のための調整試合なのでハードスケジュールは組みませんが、山口遠征はそうはいきません。ですからインターハイ前の頑張りどころを二〇日から二三日に持っていてあとは調整を重ねながらインターハイに乗り込もうと思っています。難しい調整になりそうです。

私は月刊バスケットやバスケマガジンは一切読みませんので下馬評にどんなことが書いてあるのかは知りませんが、たぶん「ダークホース鶴鳴」とかなんとか書いてあるのだと思います。うわさがどうであれ、まずは実践学園にすべてをかけて準備をします。熊本県出身(村川・永石・花田)なのに、地元でインターハイが開催されると知っていながらクレインズを選んでくれた三人と、遠い新潟から「ママの母校」(重村姉妹)を選んでくれた二人に対し、花道を歩かせてやりたいと思っています。

【結果報告】

昭和四五年〇八月	九州中学大会	準決勝	対規田中学校	於・佐賀市
昭和四六年〇六月	長崎市中総体	一回戦	対江平中学校	於・長崎市
昭和五二年〇四月	県下春季選手権	決勝戦	対活水高校	於・島原市
昭和五三年〇八月	インターハイ	準々決勝	対明星学園	於・山形市
昭和六一年〇六月	県高校総体	一回戦	対大村高校	於・佐世保市
平成〇二年〇八月	インターハイ	一回戦	対秋田経法	於・仙台市
平成〇二年一〇月	国民体育大会	一回戦	対仙台聖和	於・宗像市
平成〇二年十二月	ウインターカップ	準々決勝	対東亜学園	於・東京都
平成〇三年一〇月	国民体育大会	準決勝	対福岡選抜	於・七尾市
平成〇三年十二月	ウインターカップ	準決勝	対中村学園	於・仙台市
平成〇四年〇九月	ウインターカップ予選	決勝戦	対純心高校	於・長崎市
平成〇七年〇八月	インターハイ	一回戦	対新座総合	於・鳥取市
平成〇七年十二月	ウインターカップ	二回戦	対中村学園	於・東京都
平成〇八年十二月	ウインターカップ	二回戦	対東京成徳	於・東京都
平成〇九年〇六月	県高校総体	決勝戦	対純心高校	於・長崎市
平成一〇年〇六月	県高校総体	決勝戦	対純心高校	於・佐世保市
平成一一年〇九月	ウインターカップ予選	決勝戦	対純心高校	於・長崎市
平成一一年〇九月	ウインターカップ予選	決勝戦	対純心高校	於・長崎市
平成一二年〇八月	インターハイ	二回戦	対東京成徳	於・高山市
平成一三年〇八月	インターハイ	二回戦	対東京学館	於・熊本市

後年追加

平成十六年〇八月	インターハイ	三回戦	対実践学園	於・松江市
平成二〇年〇八月	インターハイ	二回戦	対富岡東	於・本庄市(後述)
平成二四年十一月	長崎地区新人戦	決勝戦	対純心高校	於・長崎市(既述)
平成二五年〇四月	県下春季選手権	準決勝	対純心高校	於・佐世保市(既述引退決意)

右記は、これまでのコーチ生活(三四年間)の中で敗戦のショックが癒えずに今でも脳裏に焼き付いてい

る試合の一覧です。勝てるはずなのに準備不足だった、勝てるはずなのに策戦を失敗した、勝てるはずなのにペースを掴めなかった。などなど敗因はさまざまです。結果も、惨敗有り、惜敗ありとさまざまです。シヨックの内容も、怒り、絶望、悔恨などこれまたさまざまです。

最初に挙げた九州中学大会の敗戦は「教師を辞めよう」と思ったほどシヨックを受けた試合でした。が、今回の敗戦のシヨックは過去最大級で身も心もズタズタです。本音を言えば誰にも会いたくありません。

しかし、嘆いても怒っても負けた試合は戻ってきませんし、このあとすぐ九州国体が八月二六・二七の両日長崎で開催されるのでそれに集中しなければなりません。九州国体は、Aブロックが福岡・熊本・鹿児島・宮崎、Bブロックが長崎・沖縄・大分・佐賀です。それぞれのブロックでリーグ戦を行い、それぞれのブロックの一位が本国体に出場できますが、九州国体という大会の優勝を決めるために両ブロック一位同士が決勝戦が行われます。今年はいんターハイで熊本国府が決勝進出してくれたおかげで九州国体の決勝戦で勝てば本国体の組合せは第二シードになります。

いんターハイから帰ってきたのは八月四日ですが、翌朝選手全員を連れてまた熊本まで出かけました。ベスト八に残ったチームにクレインズは本当に勝てないのか、それをこの目で確かめたかったからです。答えは、すべてのチームに勝てそうでもあるし全てのチームに負けそうでもある、でした。この日、熊本から長崎に帰ってすぐ練習をしました。国体とウイインターカップでチャンピオンになることを目指して：

「気持ち切り替えて」などと、そんななまやさしい精神状態ではありませんがとにかく前へ進みます。応援バスを仕立てて長崎から駆けつけてくれた方々やクレインズ支持者の方々に深くお詫び申し上げます。

【事前合宿】

この年の夏はにぎやかだった。熊本いんターハイに参加するチームが熊本入りする前に鶴鳴に立ち寄って合宿をしたのだ。岩手の盛岡白百合、福井商業、徳島城北に鶴鳴を加えた四チーム。盛岡白百合以外はみんなマイクロバスで乗りつけた。福井商業の中池先生からは途中何度も電話がかかった。すべてパンクの報告だった。合計七回のパンクだ。そんなのこれまで聞いたことがない。タイヤがすり減ってトレッドがなくなっていたとか、空気圧のバランスが悪かったとかではない。鶴鳴に到着してすぐ中池先生に「これだけ不運なことが続いたのだからいんターハイでは幸運続きだよ」と言ったが、福井商業はベスト八がけで愛知の星城に一ゴール差で負けた。

盛岡白百合の芳賀先生に、鶴鳴から熊本までの足はどうするつもりだと聞いたら、長崎出発からいんターハイが終わるまでマイクロバスのレンタカーを借りるという。私はそれをただちにキャンセルさせ、私のマイクロバスを大会終了まで盛岡白百合に貸してやった。そんなことに無駄なお金を使うのはもったいない。私は丁度四台目の中古マイクロバスを手に入れ、それで熊本いんターハイに行くことにしていて、三台目のマイクロバスは知人に無料で譲ることにしていた。その譲渡をいんターハイ終了後まで待ってもらい、盛岡白百合にそのバスを使わせることにしたのだ。

この年の夏はメチャクチャ暑かった。鶴鳴の体育館は冷房が効かないので蒸し風呂のように暑い。大会直前の合宿だからハードなスクリメージはしないが、それでも監督たちは熱くなって選手に檄を飛ばす。二日目の午前中の練習が終わったところで私は「午後の部はヤメ！午後は滝壺に行つて泳ぐ！」と宣言した。どのチームの選手も困惑した様子で、自分の監督の顔色を気にしながら「大会直前に滝遊びなんかしていいんだろうか」という顔をしている。それを見て私は「いいんだよ、それを蹴って午後から練習するような監督は俺がこの合宿から追放する。こんな熱いときに練習しても効果はない！」と言って、不安そうな選手や監督の思いを一蹴した。

泳ぎに行くところは諫早の先にある轟の滝だ。鶴鳴からは長崎バイパスを通つて約五〇分かかる。そこでみんなに迷惑をかけたのが徳島城北だった。長崎バイパスは途中まで長い上り坂になっている。鶴鳴バスも白百合に貸したバスも福井商業のバスも時速七〇kmぐらいは軽く出るのが城北のオンボロバスはいくらアクセルを噴かしても時速四〇km以上は出ないのである。

滝壺のすぐ上に清流荘という茶屋がある。その二階でいつも選手たちは着替えさせてもらう。一階では滝を眺めながら流しそうめんを食べる。選手たちはそうめんだけだがその日はおかみさんのサービスで我々監督には鮎の塩焼きのサービスが付いた。福井商業の中池先生は無類の麺好きで、この流しそうめんと鮎の塩焼きに大変ご満悦で、その笑顔を見て福井商業の選手たちも大変くつろぎ、伸び伸び滝遊びができた。

熊本は長崎の暑さどころではなかった。しかも、冷房の効いた体育館はメイン会場の益城町体育館と県立体育館しかない。初日の体育館は市内の高校の体育館で行われるから、初日は相手チームとの戦いではなく暑さとの戦いになる。初戦の相手は東京代表の実践学園。余裕で戦える相手ではない。が、私は選手のプレイタイムに神経を使い、予断を許さない場面でも花田や重村姉妹など、試合を仕切る選手たちをこまめにベンチに下げて休ませた。そんな状態だからずっと僅差で試合が進み、後半残り六分の時点で同点。しかしこのあと実践の選手の動きが急に重くなり。最終的には二〇点の大差で試合をモノにすることができた。策戦は大当たりだった。

しかし、翌日の二回戦では前述のように、敗戦のショックが癒えずに後々まで脳裏に焼き付いている試合がまた一つ増えた。相手は東京学館新潟で、試合のリズムとは関係なくハーフラインを越えたすぐあたりからボンボンスリーポイントを打つ選手がいてそれが当たったということもあるが、それすら普通の精神状態で試合を進めればそれほど大きな事件にならずに済んだ試合である。敗因は、選手たちが個々に暴走を始めてチーム全体に広がって操縦不能になったことだ。訓練を重ねるといことは力を付けるということよりも思わぬ事態に遭遇してもうろたえない自分を作り上げることが最大の目的である。それが、一年生や二年生の時ならともかく、最上級生になったのにこのような制御不能状態になってしまったのが無念でならないのである。

四 インディアナ遠征

参加者・保護者・指導者 各位

今回で六回目となる日米親善バスケットボール研修企画に参加希望のお申し出を頂きありがとうございます。航空会社にとっては最繁忙期であるお盆の時期ということもあり席の確保及び料金交渉に約半年を費やしましたが、ようやく正式な料金を確定することができましたので、参加費用・日程・行程などをここにご案内申し上げます。本研修を通じて皆様の夢を大きく広げるとともに、バスケットボールへの愛着を深めることができるよう最善の努力を致しますので、何卒宜しくお願い申し上げます。



インディアナ大学女子
チームヘッドコーチ
Kathi Bennett

日程 二〇〇一年八月八日(水)～八月十六日(木) 九日間

参加者 長崎女子(女)・徳島城北(女)・徳島城東(男)・倉敷翠松(女)

旅程 〇八月〇八日(水) 福岡・成田(七時半→九時一〇分) JAL三八〇便

伊丹・羽田(九時四五分→一〇時五〇分) ANA二〇便

羽田到着後貸切バスにて成田へ(約一時間)

成田・シカゴ(十四時二〇分→十一時三五分) ユナイテッド八八四便

〇八月十五日(水) シカゴ・成田(十二時二〇分→十五時一〇分) ユナイテッド八八一便

〇八月十六日(木) 成田・福岡(十九時四〇分→二十一時三〇分) JAL三八五便

成田・伊丹(十七時四〇分→十八時五〇分) JAL七九便

※ 国際線の予約は確定してはいますが、国内線は現在（二〇〇一年四月二三日現在）予定です。

○八月〇八日（水）シカゴ到着後貸切バスにてブルーミントンへ（約四時間）
○八月〇九日（木）～八月一〇日（金）インディアナ大学でのクリニック
○八月十一日（土）～八月十二日（日）日米高校トーナメント
○八月十三日（月）～八月十四日（火）インディアナポリス・シカゴ観光
参加費 全チーム共通 三〇万円

研修費用を含むもの
福岡又は伊丹発着航空運賃エコノミー
米国における団体移動交通費 ○ 成田空港施設使用料
インディアナポリス・シカゴ観光・宿泊（一部屋トナメント）
クリニック参加費用 ○ トーナメント参加費用
インディアナ大学での滞在費用及び食費
海外旅行傷害保険（希望者は別途料金にて追加申込可能）
通訳経費

保 険

※観光時の食費は含まれていません

死亡・後遺障害 二十万
疾病死亡 一千万
傷害治療 三百万
疾病治療 二百万
賠償責任 一億
救済者費用 二百万
携行品 二〇万

支払い

支払いは頭金と残金の二回の支払いとさせていただきます。
支払いは参加者個人又はチーム一括にて受け付けます。
チーム一括の場合は必ず支払者の名簿を別途お送り下さい。

頭 金 五万円
締 切 五月十一日（金）
残 金 二十五万円
締 切 七月六日（金）
キャンセルの取扱
一ヶ月から十四日前まで二万円
十三日～七日前まで五万円
六日から出発の前日まで十五万円
当日以降全額

責任者

本企画は国際教育コンサルティング GUY HEALY JAPAN が責任を持って企画・運営
致します。尚、旅行形態は企画手配旅行で東急観光が旅行取扱となり、保険は A I U が引き受け
るものです。現地のクリニック及びトーナメントはインディアナ大学が手配を行います。

キャシーベネットにスカウトされてエバンズビル大学に入学した大野慎子が四年生になった。慎子をスカ
ウトしたキャシーベネットはヘッドハンティングされてインディアナ大学に移籍した。慎子が一年生の時、
鶴鳴はエバンズビル大学のサマーキャンプに参加したが、この年はインディアナ大学のサマーキャンプに参
加した。当時のエバンズビル大学のスタッフには知り合いが居らず、三年前のエバンズビル大学のスタッフ

はほとんどがキャシーに就いてインディアナ大学に移籍したのでスタッフの気心も知れているし動きやすかったからである。もちろん慎子もエバンズビル大学から呼んでこのキャンプに参加させた。

サマーキャンプに参加するとアメリカ側が用意してくれたチームと試合をするが、シーズンオフは高校にしろ大学にしろ単独チームとして練習したり試合をしたりしてはならないというきまりがあるのでAAU（AMATEUR ATHLETIC UNION）チームといって、あちこちから個人を選び出したチームと試合をすることになる。鶴鳴が初めてアメリカ遠征をした時は、参加したAAUチームを総なめにして優勝した。その時鶴鳴チームがキャシーに強烈な印象を与えたために、慎子がスカウトされて後に渡米することになった。

インディアナ大学というところでキャンプができるというのがどれほどすごいことかというのをこのキャンプに参加した日本の高校生たちはあまり知らない。詳しく知っているのは、私と城北の富田先生と城東の古海先生と翠松の平松先生、それに慎子ぐらいである。キャンプは周囲にランニング用のタータンコースがあり、その内側にバスケットボールコートが六面取れるととてもなくでかい体育館で行われた。キャンプの締めくくりのトーナメントは準決勝まではその体育館で行い、決勝戦だけはアセンブリーホールで行うとキャシーから告げられた。

アセンブリーホールにはこのキャンプの三年前、当時ジャパンエナジーのアシスタントコーチだった三上氏と慎子の同級生で鶴鳴のキャプテンだった工藤雅子と一緒にインディアナ大学男子の試合を観に行った。日本で調べた時はその試合のチケットはソールドアウトで一枚もなかった。私はボビーナイトの事務所に電話をかけてチケットが欲しい旨伝えた。すると、マネージャーから当日用意しておくからWILL CALLで受け取ってくれという回答があった。（なぜ私がボビーナイトにチケットを用意して貰えたのかは山崎純男のホームページの平成二二年一〇月二九日付けの日々の出来事を読んでいただければわかります）

私たちが受け取ったチケットはインディアナ大学のベンチ側のゴール下から七段目の席だった。私たちの下にはブラスバンド部隊とチアガールしかいない。私は試合よりもボビーナイトの一举一動から目を離さなかった。テレビでしか観たことのないアセンブリーホールの、しかもボビーナイトの斜め前で試合を観ている自分が信じられなかった。

さて鶴鳴は、チームを二つに分けてBチームの監督を私が務め、Aチームの監督を慎子にやらせた。Aチームは決勝戦に進み、アセンブリーホールで試合をすることになった。試合はずっと競り合い、最後までどっちが勝つかわからない試合となり、最後のシュートチャンスモノにできなかった鶴鳴が一ゴール差で負けた。観衆は、アセンブリーホールのそそり立つような真つ赤な観客席にパラパラッとか居ないサマーキャンプ関係者だけだったが、スタンディングオベーションを貰った。だが、一人だけ悔し泣きしているヤツが居た。大野慎子だった。

「どうした？」と私が声をかけたら慎子は「山崎先生がベンチをしたら勝てたんだろうかと思って：」と言つて声を詰まらせた。タイトルがかかっているわけでもないし、次の大会の出場権がかかった試合でもなかったのだの国際親善である。それを自分の采配がまずくて負けたと思って泣いている。やはり慎子はただものではなかった。

この時キャシーは花田有衣はどうだと私に聞いた。私は返事を濁した。多分私が推薦したらキャシーは花田獲得に動いたかも知れないが、バスケットのプレイがいくら巧くても英語を一言も喋れない日本の高校生が、単なる憧れでアメリカの大学を卒業できるほどアメリカという国は甘くないということを私はイヤというほど知っている。花田には気の毒であったが私の判断に間違いはなかったと今でも思っている。

平成十三年八月 九州国体 優勝 スタメン 重村姉③ 重村妹③ 村川③ 永石③ 花田③

【案内文書】

補強選手は純心高校から松本選手一人。ですから、試合の出来は本体である鶴鳴のコンディションにかか

っています。その鶴鳴はインターハイ後アメリカ遠征で五試合消化。帰国後補強の松本選手を加えて国体チームとしての合宿に入り、アイシシAWの胸を借りて強化試合をしてもらいました。というわけで十八日時点での主力選手のコンディションは疲労困憊状態です。

特に今回は巨漢揃いのアメリカチームと五試合、その後実業団チームと三試合、計八試合やりました。同じ八試合でも、国内の高校生相手に八試合するのは体力の消耗が違います。それで、合宿終了後の十九日と二〇日の両日は予定を変更して休養日としました。

勝負は休養明けの二日から四日間の練習にかかっています。その四日間ですることは、従来のものと少し違った要素が混じった内容を取り入れたオフェンスの動きを主力選手に再度覚え込ませること。スクリーンを通じた「新しい動き」「従来の動き」「個人技」の使い方バランス感覚を身につけさせることの二点です。

「調子は?」「予想は?」と聞かれても正直言ってもわかりません。二一日の練習再開の状態を見てその後の三日間の練習内容に修正が加わるでしょうし、最終日(二四日)の練習の出来具合をみてゲームプランに修正を加えることになるでしょう。その結果、今年の国体のようなことが起こるかもしれませんし、今年のインターハイのようなことが起こるかもしれません。いずれにしろ、最も重要なことは選手の状態を見てその時の時の最善の手だてが打てる知恵をひねり出せるアタマを私自身が用意しておくことが大切です。

福岡選抜はインターハイ後中国遠征をしたそうです。みんなそれぞれがんばっています。自分たちだけが頑張っていると思いついて、他人も頑張っているのが見えないものから順に脱落していくような気がします。用心しなければなりません。もうひとつ、鶴鳴のインターハイの敗戦をネタにして「鶴鳴離れの中学が増えているよ」という噂がまき散らされています。敵は対戦相手だけではなく、勝負に勝つためにはこのような噂も含めてあらゆる状況にタフでなければなりません。

【結果報告】

昨年の報告書にも書きましたが、ブロック国体の重圧は並大抵のものではありません。インターハイやウインターカップは学校単位、いわばプライベート。負けても悔しさは自分たちだけのもの。でも国体はそうはいきません。県・体協・協会、そして今回は純心から松本選手ひとりにお手伝いただきましたが、このように補強に協力していただく学校などすべての人々の期待を担っての試合ですから。

疲れました。本当に疲れました。試合後、長崎新聞の城記者が取材のために近付いてきましたが、「コメントはないよ」と言っているのは彼を手でさえぎりませんでした。脳細胞がフリーズしてしまって何も考えたくない何も話したくなかったからです。城さんごめんなさい。単に疲れていただけで何の他意もありません。選手は私以上に疲れたはずですよ。三一日までゆっくり休ませます。

高校スポーツのコンディションづくりは本当に過酷で大変です。先のインターハイ準優勝の国府高校主体の熊本選抜は、リーグ戦の初戦で福岡に負けてしまったので本国内出場は成りません。熊本を破った福岡は本国内の出場権は得たものの、決勝戦で我が長崎に負けて本国内のシード権を失いました。その長崎は、決勝戦の前の試合の佐賀戦であわや負けるかというヨタヨタの試合。この試合を観ていた関係者の誰もが「決勝戦を戦う体力は長崎には残っていないだろう」と思ったに違いありません。私自身がそう思っていたのですから。

インターハイの敗戦後いいことなし。それは、アメリカ遠征後のアイシシAWとの強化試合やその後の合宿中に起きたことで、試合や練習のことだけでなく、通常の生活上のできごとも含めてのことです。今大会に入ってもそれは佐賀戦まで明らかに引きずっています。佐賀戦が終わってから一時間後に福岡との決勝戦があります。選手たちは控室に戻り、汗まみれのユニフォームから靴下まで全部脱いでグリーンローディングをしたあと決勝戦直前まで休養。その間は佐賀戦のベンチに座ったままじっと考え続けました。

三〇分ぐらい私はベンチで考え続けたあと、トランシーバーでキャプテンの重村姉を呼びつけました。そして「インターハイ以来あまりにひどい出来事ばかりだよ。でも、この決勝戦に勝てばそれらのすべてが

精算できるかもしれない。みんなにそう伝える」と言いました。その後、ウォームアップに出てきた選手たちを集めて「ドン（重村姉）から聞いたか？」と、私は選手一人ひとりの目を見ながら聞きました。選手たちは「はい」と答えます。私は「それならこの試合命と引き替えにするつもりでやれ」と言いました。

佐賀戦が終わってから私が選手に話したことはこの三つだけです。パスのことも、動きのことも、ディフェンスのことも一切言いません。決勝戦が始まると選手の動きはまるで別人、先ほどの佐賀戦がウソのようでした。私は長崎有利の滑り出しなのに敢えて試合開始後二分でタイムアウトを取り、「この試合はいけるかもしれない。神様に感謝しながら戦おう」と言いました。

【因縁対決】

決勝戦の福岡戦は絶対の自信を持って臨んだ福岡に対して佐賀戦であわや負けるかという試合をした長崎が有利に試合を進めているという意味でも観ている人にとって面白い試合だったと思うが、コート上では当事者しかわからない興味深い戦いが繰り広げられた。鶴鳴の花田対九州女子の中藤の一騎打ちである。九州女子と鶴鳴は毎年行ったり来たりして練習試合をしているので互いに相手を知り尽くしている。中藤は九州女子のエースだし花田は鶴鳴のエース（だと本人は思っている）だ。中藤と花田は互いにマッチアップで試合が始まった。

試合が始まったとたん中藤にムチが入っている。福岡選抜の吉村監督が九州女子と鶴鳴の関係を知っていて中藤をけしかけたのか中藤が勝手に自分にムチを入れたのかはわからないが、花田に対して闘志むき出しなのである。

花田は前年の九州春季選手権でも神村学園の下田にケンカを売られた。花田が下田にケンカを売られたのには事情がある。花田と下田はポジションがダブるので、長崎市出身でしかも鶴鳴でバスケットをやりたかった下田に対して私は「ポジションがダブるのでお前は神村に行け」と引導を渡したのである。鶴鳴をあきらめて神村学園に行かなければならなかった下田の「あんたには負けられん！」という気持ちはよくわかる。この勝負は下田の一本勝ちだった（前述）。

中藤はおそらく、何回も鶴鳴と練習試合をするうちに花田に対して対抗意識が湧いてきたはずだ。が、これほど闘志をむき出しにするのは花田がこの夏全日本ジュニア代表に選ばれて世界ジュニア選手権に出たからだろう。中藤もまた「あんたより私が上だということを見せつけてやる！」と思って気合いが入ったに違いない。吉村監督にけしかけられたかもしれないが、けしかけられなくとも中藤はケンカを売っただろうと私は思う。

私は試合開始後すぐそれを察知して花田をコントロールした。放置しておけば仕掛けられたケンカを買って暴走するので出したり引つ込めたりして前半は十一分しか出さなかった。後半は中藤との一騎打ちではなく、チームの一員としてプレイ出来る心身の状態になったので十八分出場させ、結果的に得点合計二六点でチーム最高得点だった。花田の一本勝ちである。それにしても、花田の生意気そうな態度がこうしてケンカを売られるのか、花田の活躍が他人の焼き餅を誘うのか、あいつはよくケンカを売られるやつだ。

五 みやぎ国体

平成十三年一〇月 みやぎ国体 三位 スタメン 重村姉③ 重村妹③ 村川③ 永石③ 花田③

【案内文書】

国体の試合は天皇杯や皇后杯の得点を取れるかどうかに神経をとがらせます。もちろん優勝するに越したことはないのですが、優勝できなくても二位の可能性があるとかベスト四は確実だという見通しが立つか立たないかがとても重要なのです。

九月十五日の夜、組合せがファックスで届きました。それを見ながら「九州国体で第二代表になってたら初戦の相手は愛知。また、インターハイで国府が二位になっていなければ九州の第一代表で出場しても本国

体での第二シードはなかった。そう思うと絶対不利の九州国体で福岡を倒してくれた選手たちに感謝、インターハイで二位になってくれた国府に感謝だな」と思いました。

もちろん、この組合せなら決勝進出は確実と断言できるわけではありません。昨年の富山国体では優勝候補筆頭の愛知が初戦で福井に負け、その福井が準決勝で長崎に負けてしまいました。このように、勝負の世界ではいろんなことが起きます。が、幸運と不運のどっちだと言えば、この組合せは長崎にとって幸運だと思います。その幸運に感謝しながら残る日数を天皇杯得点獲得に向けてがんばります。

具体的には初戦の大阪戦の準備を整えます。薫英と樟蔭東の混成ですからゾーンオフENSEをもう一度復習する必要がありますでしょう。「ゾーンデイフENSEやプレスデイフENSEに対する攻撃は大丈夫」という自身が過信にならないよう再チェックします。チェック項目は①スペイシング②タイミング③カッティング④ミートです。なかでもミートが最重要チェックポイントとなります。

【結果報告】

少年女子の部は一回戦から決勝戦まで番狂わせはなかったと思います。組合せを見て予想を立てた通りのチームが勝ち上がってきました。とはいえ、各地の厳しい予選を勝ち抜いた精鋭十六チーム。力の差は神一重です。これは安全パイだという試合はひとつもありません。

なかでも一回戦の戦いは熾烈です。ここで負ければ参加点しか得られず、一回戦を突破したチームのみが天皇杯の得点争いに参加できるからです。宿舎の茂庭荘には、山形・千葉・福井・長崎の四県のチームが宿泊。各県のチームの監督の口からは「とにかくひとつは勝ちたい」というセリフが合い言葉のように飛び出します。

長崎新聞の城記者のインタビュー「初戦突破の感想は？」に対して私は「とにかくホッとした」と答え、翌日準決勝進出の感想を聞かれて私は「ホッとしたの二乗」と答えました。茶化したわけでもなんでもありません。このことばは私の実感そのものです。

翌日の「準決勝敗退の感想は？」と聞かれて私は何と答えたのか覚えていません。ロビーでインタビューを受けたのは覚えていますが話した内容はまったく思い出せません。怒りを抑えて平静を装うのに一生懸命だったからです。怒りの原因は敗戦そのものではありません。負け方にもいろいろあります。全力をつくしたけれども「矢尽き刀折れ」という敗戦ならば私は心の底から選手をいたわってやります。しかし彼女たちは、矢も刀を与えたのにそれをどこかへ置き忘れてしばしば素手で戦うのです。それは、ありったけの知恵を絞り出して指示を出す監督としては実に耐え難いことです。

「どこまで欲深いヤツだ。少しは選手を認めてやれ」と、心の中で自分を諷める声があります。

「いいや、この選手たちはこの程度で満足できる素材じゃない」と、もう一人の自分がソツポを向いてその声に耳を貸そうとしません。全国大会で三位という成績は立派なものですが、それ以上を狙えるチームだという思いが妥協を許さないので。この二〜三年の自分自身を私は嫌いです。でも、このチームに対しては心を鬼にして最後まで追い込み続けようと思います。そして、長崎県としてのチームではありませんが、鶴鳴単独でもう一度全国優勝目指して挑戦できる大会が二ヶ月後に東京で行われますから、国体三位という足場を利用して皆様に満足していただける試合ができるよう頑張ります。

最後に、お力をお貸しいただいた純心女子高校様、選手が過ごしやすいう行き届いたサービスをしてくださりました茂庭荘の相川様、富山からわざわざ応援に駆けつけていただきました林様、もう自分のお子様は在籍していないのに茨城から応援に来ていただきました工藤様高島様はじめ多くの方々の温かい心遣いに厚く御礼申し上げます。

【新潟・富山】

みやぎ国体の帰りには、勝っても負けても新潟と富山に立ち寄って帰ることに決めていた。前年の国体でお世話になった福野町の人々に挨拶するのと新潟出身の重村姉妹にちょっとだけ里帰りさせてやるのが目的だ。新潟も富山も、神戸から仙台までの高速道路の経路である磐越道と北陸道の途中にあるのでちょうどよ

かった。

気分はむしろしゃしゃしていた。報告書でも「この選手たちはこの程度で満足できる素材じゃない」と書いているように、試合結果については満足していないのだ。だがそれとこれとは別。遠い新潟から鶴鳴進学を決めてくれた重村姉妹の故郷の前を通るのだ。親の気持ちと子の気持ちを思えばそこを素通りするわけにはいかない。それも、わざわざ途中下車して立ち寄ったのに監督が不機嫌そうな顔をしていては折角の里帰りなのに却って親子に気を使わせることになる。福野町でもそれは同じだ。折角立ち寄ったのに仏頂面をしていては歓待する方も嬉しくない。怒りは収まっていないが新潟と富山滞在期間中はしっかり封印してそれが表に出てこないよう閉じこめた。

仙台から新潟までは東北道と磐越道を通って約三時間、新潟から福野町までは北陸道を走って約三時間、福野町から泉大津の阪急フェリー乗り場までは北陸道・名神道経由で約四時間の行程だ。私は決勝戦の愛知対愛媛の試合を観てから仙台を出発した。夕方新潟に着いてそこで一泊、翌朝八時頃新潟を発って福野町に立ち寄ってそこで約三時間過ごし、午後二時過ぎに福野町を発った。仙台から泉大津まではトイレ休憩だけで高速道路を走れば約一〇時間かかるので、この二回の休憩は選手を疲れさせない意味でも丁度よかった。

私は国体やインターハイや合宿など、バスケットボール関係で長期滞在したことがないのは日本国内では栃木と群馬だけである。が、大会や合宿でお世話になったからといって再びその地を訪れたところはない。今回の富山が初めてである。もちろん私をそうさせたのは前年の国体決勝で長崎ベンチの正面応援席に陣取って「地元国体で敵を応援したからといって村八分されるなら私たちは町民税払いません」と言って長崎を応援してくれた福野町の人々の心意気だが、土地柄や風景も含めて「終の棲家にするならばこの福野町かナバインディアン」の村のどちらかだな」と思うほど居心地がよかった。

この回顧録は平成二五年四月に執筆を開始した。この年の八月末にもう一度あの時の仲間と福野町を訪ねてみようかという相談が持ち上がっている。

六 ウインターカップ

平成十三年九月 県下総合選手権 優勝 スタメン 重村姉③ 重村妹③ 村川③ 永石③ 花田③

【案内文書】

総合選手権大会に出場するのは二〇年ぶりです。総合選手権大会というのは日本協会に登録しているチームすべてが参加できる大会です。参加チームのほとんどがクラブチーム・大学・実業団です。県大会で二位までに入れば九州大会に出場できます。九州大会は十一月二日から四日まで長崎市で開催されます。さらに九州大会で優勝すれば正月に東京で開催されるオールジャパンに出場できます。

今回二〇年ぶりに総合選手権に出場したのは、九州総合選手権が長崎市で開催されるということと、公式試合を少しでも多く経験するのがインターハイ以降のもたつきを解消できるのではないかと思っただけです。この時期の事業はすべて三本立てであると、ウインターカップ予選の案内文書で述べましたが九州総合選手権までの事業を大まかに並べてみます。三本立ての意味は、三年生までを含めた鶴鳴チーム、他チームからの補強も含めた国体チーム、三年生を外した鶴鳴下級生チームの三種類という意味です。

○九月〇八日(土) — 〇九日(日) 福岡遠征(国体) 内容・福岡大学その他と強化試合

○九月十五日(祭) 鶴鳴体育祭

○九月二二日(土) — 二三日(日) ウインターカップ予選

○九月二九日(土) 県下総合選手権

一〇月〇六日(土) — 〇七日(日) 県下総合選手権

一〇月〇七日(日) — 〇八日(月) 山口又は小林遠征(国体) 内容・地元チームとの強化試合

一〇月十一日(木) — 十九日(金) 本国体(移動日も含めた日程)

一〇月二〇日(土)―二一日(日) 長崎地区新人戦
十一月〇二日(金)―〇四日(日) 九州総合選手権

その他、随時チャンスを見つけて長崎成年女子と強化試合をします。あつという間に二学期が過ぎ去っていきます。ボンヤリしている選手は置いてけぼりを食います。

【結果報告】

七月中旬から長崎成年女子チームとしばしば練習試合をさせてもらいました。八月にはアイシンAWの胸を借りてスクリメージをやってもらいました。九月になってまた長崎成年女子と練習試合をさせてもらいました。そして今回、この総合選手権で成年のチームと公式試合を四試合も経験させてもらいました。

今年のチームは身体的能力は高いのに読みが浅く、ちよつとした出来事に翻弄されやすい選手が多いので成年女子チームと試合をするのはとてもためになります。成年のチームはこちらがただ頑張るだけでは通用しないたたかさを持っているからです。

この県下総合選手権のあと、試合会場からそのまま山口遠征に出かけました。この遠征は純心の松本選手を加えた国体チームの遠征ですが、相手は山口成年女子と山口少年女子です。この遠征でもやはり山口成年女子との試合がとためになりました。九日と一〇日の両日はまた長崎成年女子と仕上げの練習試合をしてもらいます。そして、十一日の午後仙台へ向かいます。

県下総合選手権と山口成年女子との練習試合で感じたことですが、ひよつとしたら鶴鳴は八月下旬の九州国体の頃よりも少しだけ強くなったかもしれません。まだまだ甘いところはたくさんありますが「相変わらずこいつら読みが浅いな」と嘆きたくなる場面を三回に一回ぐらいは凌げるようになってきたのです。でも残りの二回については私の罵声を浴びつばなしです。これが、三回に二回は凌げるようになって残りの一回をつつき回す罵声はもう私の口から出なくなるでしょう。

国体の初戦は十四日。この日からはもう罵声を浴びせないで試合をしたいです。でも、それとて私が怒りをかみ殺して罵声を浴びせるのをがまんするのではなく、選手の戦いぶりが私の罵声を封じ込めてしまふ。そんな試合ができるようにならないければなりません。そのために、冷酷と言われようが残忍と言われようが前日の十三日までは一秒も無駄にせず、選手を追い込むだけ追い込んで国体に臨もうと思っています。

平成十三年十一月 九州総合選手権 三位 スタメン 重村姉③ 重村妹③ 村川③ 永石③ 花田③

【案内文書】

国体三位は成年の部のチームとたくさん試合をさせてもらったおかげだと思っています。この大会で成年の部のチームと試合をするのは最後になります。この大会ではひとつでも多く勝ち進んで成年の部のチームとの対戦回数を重ねることにより、上級生にとつてはウインターカップへの足がかりとし、下級生にとつては来月行われる県新人戦への足がかりとしたいと思います。

このところ、追い込むとか追求ということばが毎回文中に登場しますが、人間は自分の愚かさに直面し、一度その愚かさに打ちのめされなければ成長しません。こどもが苦しむ姿を見てると大人はつい手を差し伸べてやりたくくなりますが、それがこどもの成長を妨げるものになります。がまんしてください。

【結果報告】

組合せ表を見た時は準決勝で鶴屋を破ってなんとか決勝進出を果たしたいと思いました。鶴屋のデータを収集し、鶴屋の戦力をちゃんと分析してそう思ったのではなく「数人の引退選手が出ているから全盛期に比べて戦力はダウンしているはずだ」と勝手にそう思ったので、鶴屋さんにはずいぶん失礼なことを考えたものだと思います。すみません。

大会前日(十一月二日)、三菱重工の体育館を借りて鹿屋体育大学と小林高校と鶴鳴の三チームでスクリメージをやりました。このスクリメージが終わった時点で上記の考えが一歩進み、あわよくば優勝を狙いたいという気持ちになりました。そう思った理由のひとつには「鹿屋体大には手も足も出なかった」という感

想を持たなかったことが挙げられますが、それは第一の理由ではありません。本番の試合ではスクリメージのようにうまく行かないのは百も承知です。

第一の理由は、立川と清水（一年生）の両長身選手のディフェンス特訓のために考え出した練習内容が上級生にも浸透し、鹿屋体大と小林高校とのスクリメージで随所に出たことにあります。これはとてつもなく大きな収穫です。なぜなら彼女たちはいつも、だれからも「オフフェンスはまあいいとしてディフェンスがねえ…」と言われ続けて来たチームだからです。「お、今までとは違うぞ」と、第三者ではなく当の本人たちがコートの上で実感した。しかももつとも気になっていた部分が…。これほど元気づけられる出来事はめったにないでしょう。

しかしそれは、鶴屋戦でシャボン玉になってしまいました。「守ったッー」「苦しいシュートだ」「ヨシー！」が、次の瞬間ガバーツとオフフェンスリバウンドを取られてねじ込まれる。そんなことが前半にも後半にも頻繁に起きました。頻繁に起きたうちの三本に一本でもリバウンドを制していれば試合展開はまったく違ったはずです。では、スクリーンアウトの練習をすればそれが解決できるのかというところでありません。それは、状況把握能力の問題だと思います。もともと、立川と清水のために始めた練習が上級生まで波及しただけで、上級生のために本格的に取り組んだのではないので上級生の訓練回数が足りなかったのです。

ともあれ、この九州総合選手権で元気の素が見つかりました。あと正味二六回の練習でディフェンスの、「できた」「守った」「大丈夫ー」をもっと膨らませてウィンターカップに臨みたいと思います。シャボン玉は屋根までしか飛ばません。屋根まで飛んで壊れて消えてしまいます。アドバルーンは少々高く挙げてても壊れません。成井千夏は卒業二週間前に弟子と認定しました。最後の最後まであきらめなければこういうことも起きます。さんざん罵倒してきた三年生ですが、あと二六回の練習で弟子として認定してやれるまでに引き上げ、最後の大会でアドバルーンを上げたいと思います。

平成十三年九月 ウィンターカップ予選 優勝 スタメン 谷川① 二宮① 林田① 立川① 清水①

【案内文書】

九州国体が終わった後四日間のオフ。練習再開は八月三十一日の午後二時。私はオフの四日間、三十一日の午後二時に再び選手たちの顔を見るのを楽しみにして過ごすことはできませんでした。むしろ、顔を見るのが怖いという気持ちで過ごしました。その理由は、九州国体で優勝したものの釈然としないしこりが残り、その釈然としないしこりがこれからも延々と続くのか、それとも九州国体の優勝によって霧が晴れるようにサーツと消えてなくなるのか、それが読めなかったからです。

釈然としないしこりとは、相手がディフェンスを変えたあとの対応のもたつきです。去年は見られなかった現象です。今年のスタメンの五人は昨年もスタメンで戦っているにもかかわらずです。オフフェンスの動き・バランス・間、それを本当に理解していないから起きた現象なのか「勝たなければならない」というプレッシャーが緊張を誘ったからそうなったのか、それがよくわかりません。

そして、それが解決しなければ安心して国体に行けません。ですから、八月三十一日午後の練習再開からずっと、そのことにピンポイントでの絞った練習をしています。まるで講習会です。練習は、プレイーストップ（指摘・質問・説明）―リプレイの繰り返しです。スピードやスタミナなど、強化しなければならぬ課題はたくさんあります。しかし、そんなことよりも「理解できた」とか「混乱を誘う場面に遭遇しても大丈夫だ」という安心材料が得られることの方が絶対優先です。

この案内文書は、ウィンターカップ予選の案内文書ですが、ウィンターカップ予選をどう戦うかということよりもそれを飛び越えて本国体のことが気になります。それと同時に、本国体終了後に待ち受けている長崎地区新人戦のことも気になり、さらに年末のウィンターカップのことも気になります。それらのことをこのウィンターカップ予選で見極めなければなりません。これからは練習も試合もすべて三本立てです。

もうひとつ、この時期常に私のアタマを悩ますのが選手の進路です。スタメンの三年生のうち二人は実業

団希望で三人は大学進学希望です。彼女たちをどこかに収めるだけならそれほど悩まなくて済むのかもしれませんが、先方にも有り難いを思われ、本人にも適材適所である行き先を選んでやらなければなりません。それが難しい。ここに掲げた三つの課題、しこり・新チーム・進路。いずれも「ま、いいか」ではダメなのです。

【結果報告】

できれば、重村姉妹・村川・永石・花田は使わずに決勝戦も戦いたかった。それができなかったのが残念です。谷川と二宮（いずれも一年生）の目の瞳孔が開いてしまって制御不能になってしまったのが大きな原因です。県大会レベルではボール保持に心配がある二人ではありませんが、決勝戦のふたりは全体の動きの中で今何が起きているのかが見え、局地戦で奮闘した挙げ句自滅して相手ボールにしてしまっうプレイから抜け出ることができませんでした。上級生の交替容易員で出場すると違って最初からスタメンで出場する重庄がそのような結果を生んだのでしょうか。

決勝戦の日、私は選手を集めて谷川・林田・立川・二宮・清水（すべて一年生）に質問をしました。

「純心のスタメンの背番号を五人とも言えるかい？」

指名された選手全員が「…」と口ごもったままです。この五人は今大会ずっとスタメン。一ヶ月後の地区新人戦にもスタメンで出場する。それははっきりとわかっていることです。それならば、純心や長崎商業の新しいチームの主力選手の働きぶりが気にならなければならぬ。あと一ヶ月後には主役を担うシーズンが開幕するという自覚があれば、誰もが純心についての克明なレポートを作成することができ、目を閉じれば脳のブラウン管に純心の選手たちの背番号がくつきりと映し出された試合が展開されるはず。それなのに結果は「…」でした。

私が昨日「次の純心と長崎西の試合をよく観ておけよ。どちらも地区新人戦で当たるかもしれないからな」と指示していたら選手たちは熱心に純心と長崎西の試合をスカウトしたかもしれない。しかしそれは指示されたから行動を起こしただけで自発的な行為ではないので自分のものになりません。

大人が介入し過ぎたためにこのように指示されなければ行動できない指示待ち族の若者は年々増える一方です。おとながしつけをすることができなくなつたために、自動販売機の周りの地べたに座り込んでジュースを飲み、空き缶を道路に放置したまま平気で立ち去るジベタリアンの若者が年々増えています。世の中はそうですが、少なくともスポーツ選手からはそんな若者はひとりも出さないという気持ちで鶴鳴の選手のしつけをしていこうと思います。

平成十三年十二月 ウインターカップ一回戦敗退 スタメン重村姉③ 重村妹③ 村川③ 永石③ 花田③

【案内文書】

十一月十七日から十二月三日まで、永石・重村妹・村川の大学入試が飛び飛びにあつたので全員揃わない日が続きました。続いて期末試験があり、それが今日（十二月五日）終わりました。今日から全員揃った通常の練習が発当日までに十二回できます。この十二回の練習で確認と仕上げをして大会に臨みます。

重村姉以下スタメンの五人は入学当初から主力選手として公式試合に出場してきました。しかし最初の一年間はチームの将来像が描けず苦しみつづけました。このチームの先行きが見え始めたのは昨年の二月。苦肉の策として花田をポイントガードにコンバートした時からです。しかし先が見えたと言っても毎日がモンスーンの吹き荒れるインド洋を航海しているようなもので、一日たりとも平穏な日はありませんでした。それもあと三週間ほどの港に入港できるのか答えが出ます。

この二年半、いろんな思い出ができましたが、荒波のインド洋航海だったからといって苦しい思い出ばかりではありません。最後は誰もいない小さな港よりも大勢の人が出迎えてくれる大きな港に入港したいのかもしれませんが。あと三週間、ケガをさせないよう、風邪を引かせないよう、細心の注意を払って東京に乗り込みたいと思います。

【結果報告】

平成十三年十二月二二日。この日を私の終戦記念日とします。

この三年間は、このチームを創るといふより彼女たちの中に潜む魔物との闘いに明け暮れました。「このチームは日本一になれる。魔物さえ退治できれば…」と思いついて闘ってきましたがダメでした。魔物を退治しなければ日本一にはなれないとわかっていながら臨んだ最後の大会。「これが最後だ、頼むからおとなしくしていてくれ」と、祈るような気持ちで臨みましたがいたずら好きの魔物は勝負所で登場し、ちよっかいを出して彼女たちをもてあそびました。

「短期決戦でなければアメリカには勝てない」とわかっているながら太平洋戦争の指揮を執らされ、それが長期戦になってしまった時の山本五十六元帥の心中が推し量れます。山本元帥は終戦を待たずにブーゲンビル島上空で戦死しましたが、私は終戦まで生き延び、玉音放送を聞かなければならなくなりました。私の場合の玉音放送は常葉学園戦の試合終了ブザーですが、皇居前でひれ伏して玉音放送を聞いていた国民の胸中もまた察するに余りあります。

魔物は、時として彼女たちを臆病者にさせ、時として歯止めの利かない暴走へと駆り立てました。その魔物を最後までおとなしくさせたまま試合ができたのはただひとつ、昨年の富山国体だけです。昨年のウインターカップと今年のみやぎ国体は少しだけおとなしくさせることができましたが、一昨年のウインターカップと昨年の岐阜インターハイ、今年の熊本インターハイは魔物に翻弄されてボロボロになりました。

「私たちは訓練によって培ったものがある」「私たちは訓練によって弱点を克服した」そう思える者だけが勝者になることができます。そういう思いを持って彼女たちを卒業させたかったのですが、それが叶わなかったのが無念です。彼女たちはこれからも大学と実業団でバスケットを続けます。これからお世話になる指導者の方々に魔物退治をバトンタッチしなければならないのは心苦しいのですが、よろしくお願いいたします。

三年間、悪戦苦闘の魔物退治でしたが完敗というわけではありません。重村妹だけは魔物を追い出すことができました。ということは、時間がかかったとしても他の四人もいずれ魔物を追い出すことができるかもしれないと言えるわけで、もしそうならば、正月のオールジャパンで揃って顔を合わせるというのが夢ではありません。無念ではありませんが、そういう思いを込めて彼女たちを送り出したいと思います。

【丹原】

前年度からずっと、遠征や合宿で鶴鳴と死闘を繰り返してきた丹原高校（瀬良監督）は、昨年度インターハイ三位、国体ベスト十六、ウインターカップベスト八。今年度はインターハイ三位、国体二位、ウインターカップ二位とすばらしい成績を収めた。

この時点での私は五九歳。コーチ歴は三八年。目の前に定年を控えている。この三八年間に多くのチームと対戦し、多くのコーチと出会ったが、勝ち負けを抜きにして、訓練されたチームとはこのようなチームのことを言うのだという意味で、丹原ほど手強く神経をすり減らされるチームに出会ったことはない。私は前年度の夏に死闘を繰り返して広げてからずっと、丹原を目指し丹原に追いつこうと思ってチーム創りに励んだが、遂に捕まえることはできなかった。

その後、結局私は十一年間鶴鳴学園でチームの指揮をとることになり、七〇歳になった平成二五年三月末に引退したが、その十一年の間にも丹原のようなチームには遂に出会わなかった。瀬良先生に脱帽！